

■■日本現代中国学会ニューズレター第 29 号■■

2010 年 1 月

CONTENTS

- 卷頭言
 - 並木頼寿先生をしのぶ
 - 訃報
 - 日本現代中国学会事務局宛寄贈図書・雑誌
 - 事務報告
 - 地域部会活動報告
 - 2010 年度学会スケジュール（予告）
-

【卷頭言】

「民」と交わる中国研究の可能性

阿古智子（早稲田大学）

昨年 9 月末に、拙書『貧者を喰らう国』（新潮社）を出版した。一般の読者にも読んでもらえるよう編集者と相談してつくったもので、学術書の体裁を取っていないが、学術研究のために収集した資料や実施した調査に基づいており、当然、私自身の研究に対する姿勢が現れている。ありがたいことに、新聞や雑誌が書評欄で本書を取り上げてくれ、知人や読者からも多くの感想文が届いた。共感や賛同だけでなく、批判的な意見ももちろんあったのだが、そのうち複数の人から、「題名がよくない。反中的な本だと誤解される」と指摘された。また、「個々の事例を追っているだけでは中国の全体像が見えない。理論的な分析が不足している」というような研究者からのコメントもあった。

確かにこのタイトルでは誤解を招きかねないだろう。配慮が足りなかったかもしれない。だが、本を読めば分かっていただけだと思うが、私は研究者として中国をより深く理解するために、「反中」でも「親中」でもない立場を貫こうとしたつもりである。それにしても、なぜそれほどまで強く、「反中」や「親中」が意識されるのだろうか。また、「理論的な分析が弱い」という批判に対しては、それを自覚し、常に頭に置きながらも、「早急に理論的な答えを出すのではなく、中国社会のさまざまな現象を実地調査によって理解する作業を重ねた上でそこに辿り着きたい」という気持ちがある。

そんなことを考えている時に、麻生晴一郎著『反日、暴動、バブル：新聞・テレビが報じない中国』（2009 年、光文社新書）を読み、胸に塞がっていたものが幾分取れていった。特に、自分が意識的に中国の「民」と交わってフィールドワークを行うことに重点を置いてきた理由が、より明確に説明できるように感じた。

日本人研究者でチームを組んで中国に調査に行くと、大抵、役人に付きまといられる。地

元政府に予め許可を得て、調査のアレンジを依頼するのは当然のことである。しかし、このような調査において、地元の人々が自然体で我々に接してくれることはほとんどない。役人がならみを効かせているからというだけでなく、初対面の外国人に対して、人々がそう簡単に心を開くわけがないからだ。それに、私は性格上、地位の高い人を前にすると身構えてしまい、「自分はこういう人たちとうまく付き合えない。彼らからは有用な情報を得ることができない」と本能的に感じ、身分や価値観において隔たりを感じない人たちと接することを好む。当然、情報統制の厳しい中国では、政府が提供するデータの多くが依然信用できないという感覚もある。

そのため、私はなるべく、既に地元の人々と密な関係を築いている中国人の研究者、NGOスタッフ、弁護士、ジャーナリストらを頼りに現地に入り、同じ場所を何度も訪問するようにしている。いや、自分が主体となって調査するというよりは、中国の友人たちが行っているプロジェクトや調査にメンバーとして入れてもらったり、彼らの活動を傍で眺めたりしながら、情報を集めるというようなやり方だ。しかし、それでも「民」との交わりにこだわる自分の行為を裏付けるものが何なのか、「民」と交わるというのが「民」とは一体誰を指すのかについて、十分に説明できなかった。麻生の本はその疑問を解く鍵を与えてくれた。

麻生は、中国の文化活動を大きく、「官方」（官製：伝統メディアや映画製作所など政府の息のかかったもので、文化活動の圧倒的多数を占める）と「辺縁」（政府と対立するような地下活動で、伝統メディアはあまり伝えないが、最近はニューメディアが好んで取り上げる）に分け、「中国の担い手たちは官方の映し出す現実を嘘くさく、しらじらしく思って、本当の現実を掴み取ろうとする」（P. 141）と指摘する。さらに興味深いのは、彼が「中国の担い手」として、自らを辺縁ではなく「小衆」ととらえる人々にも注目している点である。小衆は反政府のニュアンスをもつ辺縁ではなく、メジャーを目指す「大衆」の文化が官方から押しつけられたもので、「假的（ニセもの）」でしかないという感覚から生じる。つまり、小衆は自らの生活感覚から出発しており、官方と対立的な響きを持つ辺縁とはニュアンスが異なる。中国社会に入っていく中で、私自身も麻生のいう官方を避け、辺縁や小衆の生活や文化をとらえようとしていたのではないかと感じた。

民間の動きが活発化しているのは、官方が代表し得ない空間が広がっているからである。しかし、「民間の動きなど些細なことにすぎず、中国の本質とは関係ない」（P. 186）という日本や中国の同業者の批判を前に自問し続けた麻生は、情報がきわめて不透明な中で、多数派の動きを追いかけようとし、客観的データにこだわりすぎることは、「ともすれば誰も触れたがらぬ闇を膨らませていくことになりかねない」（P. 248）と考えるに至る。

また麻生は、「自らが中国と関わるにあたっての立ち位置の必要性」にも触れ、「立ち位置の設定を困難にし、中国におけるいかなる問題・価値観とも触れ得なくさせてしまう要因の1つに、親中と反中が挙げられるのではないかと思う」（P. 255）、「中国という一元化されえぬ隣国を強引に1つに束ねた概念が立ち位置として強い影響力を保持していることは、問題にせねばならない」（P. 255-256）と記している。

このような麻生の主張に強い共感を覚えた。泥臭い人間関係の中にまみれ、その温度を感じながら観察と描写を繰り返すことで、複雑に変貌する中国社会のダイナミズムをとら

え、そこで葛藤しながら自己を模索する人々の息吹を聞くことができる。そして、そうするためには、研究者自身が自らの立ち位置を認識しようとする姿勢を保たなければならない。中国は巨大かつ多様で、どこを切り取っても簡単に全体を見通すことはできない。理論化を避けようとする「甘え」だと言われるかもしれないが、一元的な「中国像」が一人歩きしがちな現状において、結論を出すことを急ぐ必要はないのではないか。

私が大学で担当する講義「現代中国の政治社会変動」には、さまざまな国・地域の学生が出席しているが、これまで受けてきた教育や接してきた情報によって学生たちの中国に対する見方は大きく異なり、毎回のように白熱した議論が展開される。例えば、スウェーデンの学生が「出身地や社会階層に関わらず平等に教育を受ける機会が保障されるべき。標榜する社会主義と現実があまりにもかけ離れている」と中国の教育政策を批判するのに対し、中国大陸出身の学生は「どの国に絶対的な公平があるのか。海外のメディアはネガティブな側面をとらえすぎる。中国がスウェーデンのような小国の政策を実施できるはずがない」と憤った。授業後に私の元にやって来た台湾の学生は、「先生は自分の価値観では到底受け入れられないようなことがまかり通る中国で、よく冷静に調査ができますね。私だったら耐えられなくなる」と話した。

議論が感情的になるということは、具体的に問題設定を行っていない証拠であり、教師としてその点を指導すべきであることは言うまでもない。学生たちの中には、私が「反中」なのか、「親中」なのかを見極めようという者もいるかもしれないが、そのような短絡的な見方もして欲しくはない。しかし私は、中国研究の入り口に立ったばかりの学部生にとって、素朴な疑問をむき出しにしたインターアクションも無意味ではないと考えている。異なる立ち位置から問題をとらえれば、分析の視角や解釈の尺度が重ならず、摩擦が生じるということが分かる。それによって、自分の立ち位置を相対化し、立ち位置を少し変えることで、従来見えなかった問題が見えるという可能性に気付くことができる。そして、それに気付くよう学生を導くことが、教師の役割なのではないだろうか。

このようなことをつらつらと書きながらも、私は依然、研究者としても教師としても方向性を定めきれていないというのが正直なところである。しかし、中国の「民」は私に考えるための材料を数多く与えてくれる。「民」と共に葛藤しながら、少しずつでも学びを進めることができればと思う。また、学生たちにも教室を飛び出し、積極的にさまざまな社会活動に参加する中で五感をフルに使って感じ、考えて欲しいと思う。

【並木頼寿先生をしのぶ】

此の情 追憶を成すを待つ可けんや
——恩師・並木頼寿先生をしのぶ——

孫江（静岡文化芸術大学）

時の流れははやく、過去はもう戻ってこない。それでも私は十六年前の夏の日をはっきりと思い出すことができる。太陽の光が燦々と桜の木にふりそそぎ、葉は夏の風にそよぎ、鳥がさえざっていた。それは私が日本に着いた翌日のことだった。

京王井の頭線の駒場東大前駅西口を出て北へ歩くと、東大駒場キャンパスにつながる細い小道がある。もうすぐ並木先生に会うのだと思うと、私は覚えてたの日本語を思わずもう一度つぶやいていた。そのとき、向こうから歩いてくるのが先生だと、妻が私に合図した。先生は中背で、普段着を身につけ、縁の大きな眼鏡をかけていた。私はあわてて進み出た。

「はじめまして、どうぞよろしく申し上げます。」

先生は低い声で返答された。

「個子真高！」（「背が高いですね」）と、妻が通訳してくれた。

「但肯定不是高人！」（「背は高くても、徳は高くないです」）

私の口をついて出たことばに、先生はひと息おいて笑みを浮かべられた。カールした豊かな髪が笑い声とともに揺れていた。

先生は正確で流暢な中国語を話すことができたが、私の記憶では、日本語を解さない学者がいる場合を除いて、先生が私に中国語で話されたことはない。来日前、日本語を勉強したことのなかった私は、先生の研究室に行くときはいつも、まるで強敵に臨むかのように緊張し、日本語の言い回しと専門用語を丸暗記しては、本を借りるや急いで辞去したものだ。やがて日本語が上達するにつれて、先生の研究室にお邪魔する時間は長くなり、いつしか煙草を取り出し、先生とともに紫煙をくゆらすようになった。日が暮れてなお話の尽きない先生が、戸棚からお酒を取り出し、私と杯をかわすことも一度や二度ではなかった。こうして一年が経つころには、やがて渡米したいという気持ちは私の心から消えていた。

駒場での六年間、先生のもとで主に近代日中関係史を学び、ゼミでは明治期の文献を大量に読んだ。博士課程に入り、私は日本におけるアジア主義をテーマに論文を書くつもりだった。先生は、「それもいいですが、博士論文には自分が一番得意なテーマを選んだ方がいいでしょう。」と言われた。ご自分の意見を人に押しつけることのない先生の一言一句を、それだけに私はかえって真剣に受けとめた。先生のそのひと言のおかげで、私は博士論文のテーマを変更した。博士論文完成後、私は民間宗教の観点からアジア主義の研究に着手したが、それは私が長年の勉強の末にようやくたどり着いた新しい研究テーマであった。実は、先生のおっしゃった「一番得意なテーマ」とは、オリジナリティがあるかどうかを言われていたのである。

対象が広くて苦勞した私の博士論文では、構想から執筆に至るまで、幾度となく先生の手を煩わせた。あるとき私は千年王国の理論で中国の「末劫」思想を解釈しようと思いついた。構想を聞いた先生は、「その二つは同じですか」と問い返された。私は落胆すると同時に、はたと悟るところがあった。もし、私の博士論文が中国の社会と革命の起源について多少なりとも新たな知見を提出し得ているとしたら、あのときの先生の話が転機だったのである。

八年前、先生は癌と診断された。先生が電話でそのことを告げられたのは、手術後まもなくのことであった。翌日、事前の連絡もせずに東京へ駆けつけた私に対して、先生はとてもお元気で、いつも以上にたくさん話された。先生は、教科書の歴史を研究するプロジェクトを立ち上げるので、君も参加してほしいと言われた。もともと社会史と政治史を研究していた私がなぜ思想史に転じたのかといぶかる友人もいるけれど、私は先生のもとで

教科書の研究を進めるうちに、近代の公共知——東アジアにおける近代知識空間の形成がいかに重要な問題であるかを発見することになった。

二日後、東京から名古屋の自宅へ戻ると、先生の故郷、魚沼産のお米が届いていた。人に厚く己に薄い先生の態度は、病を得てもまったく変わることはなかった。

先生の病気を知って、学生たちは狼狽した。中には漢方の名医を呼んで先生の治療に当たらせてはどうかと言う者もいた。私は先生の性格を考え、軽はずみな行動を取らぬよう皆を説得した。思えばこの八年間、毎月のように私が新幹線で往復したのは、先生から教えを受けるためだけではなく、先生の体調を知っていたがためでもあったのだ。

去年の三月六日、先生は山梨県で開かれた民間宗教の国際シンポジウムに参加される予定だったが、当日になって突然都合により欠席された。四月の第三日曜日、先生の研究室で開かれる予定の読書会も、先生の都合により場所が変更された。私はかすかな不安を覚えた。その翌日、先生のお宅に電話すると、奥様が出られた。先生の具合を尋ねると、奥様は治療は順調だと言われたが、その声にはどことなくかげりが感じられた。先生にお会いしたいのですがと言うと、一時間後にもう一度お電話ください、そのころには帰宅しているでしょうとのことだった。電話をかけ直すと、今度は先生が出られ、明日の朝八時半に研究室に来るように、と淡々とした口調でおっしゃった。

翌火曜日、先生は午前中に二コマの授業があった。一つは学部生の世界史、もう一つは博士課程のゼミ——以前、私が学生だったころと同じ時間割だった。私は早めに着いたので、先生を迎えに駅の方へ歩いた。先生の研究室と駅を結ぶあの細い小道で、駒場東大前駅の西口を出て来られる先生の姿が見えた。十六年前、はじめて先生にお会いしたのもこの小道だった。容赦ない時の流れは、先生のあのカールした豊かな髪を白くしていた。私は先生とともに研究室まで行き、研究室から教室までお供した。その間ずっと、先生は私に学校の様子や、いま取り組んでいる研究について尋ねられた。冬は去って春となり、桜の木は一面の新緑だった。講義棟へ消えてゆく先生の後ろ姿を見ながら、私は心苦しきでいっぱいだった。この八年間、先生はこのように病をかかえながら、授業をされていたのだ。

五月十七日にお会いしたとき、先生の豊かな髪はすでに薄くなり、かなり痩せられていた。六月二十五日の読書会の席上、並木ゼミの仲間と論文集を出版しようという話が出ると、先生はとてもうれしそうだった。七月二十三日の夜、読書会のあとで駒場近くの居酒屋に入った。その日の先生は興さめやらぬ様子で、たてつづけに生ビールのジョッキを二杯あけ、教科書に関する論文集の編纂について語られ、八月三十一日の再会を約した。

八月四日の午後、私は床一面に広げた本や資料を整理していた。突然部屋に入ってきた妻は目を真っ赤にしていた。ついこの間、酒席で談笑したばかりだったのに、そのわずか十日後には幽明界を異にするとは、なんと痛ましいことか。帰宅した娘は、すぐに我が家の様子がただ事でないことに気づいた。先生のお宅で過ごしたお正月のことは覚えていても、生まれてから幼稚園に上がるまで、先生がどれだけ可愛がってくれたか、娘は知らない。私は先生の思い出に満ちた写真と手紙を、アルバムから一枚一枚取りだした。私が哀惜の念を学界の友人たちに伝えると、彼らは続々と先生の追憶を電子メールにしたため、弔意をご遺族に伝えてほしいと言ってきた。カルチュラル・スタディーズの大家ドゥアラ教授は渋谷のインド料理店で、これは オーセンティック 真正なインド料理ではないと先生に冗談を言っ

たことを回想する。楊念群教授は、先生と北京で刺身を食べたときのことが忘れられないと言う。「初めての刺身を前に私が怖がっているのを見て、先生はにこにこされていた」と。東京滞在中に先生の読書会に参加した王笛教授は、その体験を講演や文章で何度も語り、東洋史研究の伝統を称賛する。

此の情 追憶を成すを待つ可けんや、只だ是れ当時 已に惘然。(李商隱「錦瑟」より)

時の流れははやく、過去はもう戻ってこない。それでも私はあの最後の夏の日を忘れることはないだろう。桜の木を照りつける灼熱の太陽、葉を焼き焦がさんとする熱風、いつまでも続く読経の声。先生は飄然と私のもとを去っていかれた。

この残忍な八月に、
別れはかくも不意に訪れました。
目は涙にかすみ、
語るべき言葉も見つかりません。
もう一度、教室で先生のご講筵に連なりたかった、
もう一度、居酒屋で先生のご温顔に接したかった。
八月の面会、九月の研究会、十月の新学期……、
これらすべては、
もはや無情にも果たされることはありません。
別れは、どうしていつも一方的なのでしょう。
どうして炎天の夏が、かくも冷たく感じられるのでしょうか。
どうして我々はかくも頑なに時の歩みを止め、
時間を元に戻したいのでしょうか。

この残忍な八月に、
我々は涙の中で記憶をさかのぼります。
十年前、
バークレイのウェイクマン教授と私は、先生とともに北京にいました。
ウェイクマン教授が「アメリカに来て私のもとで勉強したかったのではないかね」と
聞いたので、
私は「あなたよりもっとよい先生が見つかったのです」と答えました。
驚いたウェイクマン教授はしばらくしてその意味を理解すると、
私たちは三人で大笑いしたものです。
その笑い声は国際シンポジウムのホールにこだましていました。
先生、ご存知ですか？
どれだけ多くの方が先生を敬愛し、
どれだけ多くの留学生が先生のために日本観を改めたかを。

この残忍な八月に、

世界は記憶の中をさまよっています。

日本から中国へ、
アジアから欧米へと。

どれだけ多くの方が先生の学問と人柄に思いをはせていることでしょう。

カルチュラル・スタディーズのインド人学者ドゥアラ教授は東京のインド料理店で先生から受けたカルチャーショックを忘れられないと言います。

楊念群教授は曾祖父・梁啓超の日本体験を先生のおかげで体験できたと言っています。

アメリカの王笛教授は先生のおかげで日本の読書会に魅せられ、そのやり方を多くの仲間たちに伝えています。

この残忍な八月に、

別れはかくも不意に訪れました。

目は涙にかすみ、

語るべき言葉も見つかりません。

別れは、どうしていつも一方的なのでしょう。

記憶は、どうして八月四日で止まってしまったのでしょうか。

八月四日、

それは我々の心に刻まれた永遠の痛み。

* 文末の詩は、筆者が 2009 年 8 月 12 日に行われた並木先生の葬儀で読んだ弔辞である。

** 本稿の中国語版は『博覧群書』3月号（2010年3月1日）に掲載。

【訃報】

儀我壯一郎会員（大阪市立大学名誉教授）：2009年12月8日、脳内出血にて逝去。享年90歳。

安藤彦太郎会員（早稲田大学名誉教授、元日中学院院長）：2009年10月26日、膀胱がんにて逝去。享年92歳。

ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

【日本現代中国学会事務局宛寄贈図書・雑誌】

（2009年9月～2010年1月）

- ・ 鮎京正訓編『アジア法ガイドブック』名古屋大学出版会、2009.10
- ・ 上原一慶『民衆にとっての社会主義—失業問題からみた中国の過去、現在そして行方—』青木書店、2009.11
- ・ 山下昇・龔敏編著『変容する中国の労働法—「世界の工場」のワークルール—』（九州大学出版会、2009.12

- ・ アジア経済研究所『アジア経済』2010年1月号まで

【事務報告】

一、日本現代中国学会 2009 年理事会議事録

[日時] 2009 年 10 月 17 日 10:00-12:00

[場所] 神戸大学百周年記念会館会議室 A

1. 理事長あいさつ

冒頭に、佐々木理事長の多数の理事出席に感謝する旨のあいさつがあった。

●報告事項

2. 会務報告（事務局長）

事務局長より下記の会務報告があった。

a)経過（ニューズレター、学会 HP 掲載事項は省略）

・事業計画の内容はすべて順調に実行された。6 月の関西部会大会は、参加者 110 名であった。質の高い学会活動を行うことのできた一年であった。

・常任理事会は学会の日常意思決定機関として機能している。二回の常任理事会は、大阪での開催にもかかわらず構成員ほぼ全員の出席があった。

b)学会現勢（2009 年 9 月 30 日現在）

・個人会員 662 名、団体会員 4 名、計 666 名（2009 年 10 月 17 日理事会で承認予定の 22 名は含まず）。昨年同期（2008 年 9 月 30 日）は個人会員 658 名、団体会員 4 名、計 662 名で、4 名の微増。2009 年 9 月 30 日に会費滞納四年の会員 19 名を除籍、他に退会者 8 名（逝去含む）。

c)財政

別項の会計報告にもあるように、約 40 万円の赤字であった。主な原因は、会費収入の伸び悩みである。700 名納入で予算を組んだが、620 名納入に留まった。次年度は、会員拡大に努め、退会者再入会を呼びかける、支出を抑制する、などの対策をとるが、現状が続くと、二、三年後に会費値上げが必要になるかもしれない、という見通しが述べられた。

3. 会計報告

菅原会計担当理事より、会計報告がおこなわれた。

4. 各地域部会報告

高見澤関東部会代表、辻関西部会代表、新谷西日本部会代表より、各地域部会の活動報告がおこなわれた。

5. 編集委員会報告

白水編集委員長より『現代中国』第 83 号が刊行された旨報告があった。審議の中で、『現代中国』掲載書評、大田勝洪記念中国学術研究賞のあり方などについて意見交換がなされた。

6. 広報委員会報告

石塚幹事（加茂広報委員長代理）より、学会 HP 運営、ニューズレター発行の報告があ

った。

7. 企画報告

大西企画担当理事より、現中学会編『新中国の60年—毛沢東から胡錦濤までの連続と不連続—』（創土社）刊行の報告と、販売促進の要請があった。

8. その他

特に報告はなかった。

●審議事項

9. 新入会員承認

22名の入会承認があった。

10. 2009-2010 事業計画案

事務局より、下記の提案があり審議の結果承認し、総会に提案することとした。

a) 来年度全国大会

- ・中央大学（実行委員長：斎藤道彦会員、事務局長：土田哲夫理事）
- ・来年度全国大会の共通論題などは、新企画委員会（仮称）を設置して検討する。新企画委員会（仮称）の詳細は、来年1月頃開催予定の常任理事会で決定する。

b) 編集、広報活動

- ・『現代中国』第84号を編集・刊行する。具体的内容は編集委員会に一任する。編集業務の一部を大学生協学会支援センターに委託することを検討する。
- ・広報委員会のもとでニューズレターを刊行し、ホームページの充実に努める。
- ・会員から時に同報メールでの企画紹介の要請があるが、同報メールは一通3000円のため直接学会業務に関する内容に限定している。学会ホームページ・掲示板を活用されたい。

c) 企画

- ・『資料：日本現代中国学会の60年』（仮題）を編集し、来年度全国大会時刊行をめざす。
- ・企画担当理事などの協力を得て瀬戸事務局長が編集にあたる。『現代中国』総目次、全国大会報告一覧、学会役員一覧、学会声明一覧、年表などで構成し、コメントはつけない。財政が厳しいため、安価な発行形態を追求する。

d) 地域部会援助金増額

地域部会の活動を促進するため、現行の関東、関西部会各6万円、西日本部会3万円を、関東、関西部会各10万円、西日本部会5万円に増額する。

e) その他

- ・『新中国の60年—毛沢東から胡錦濤までの連続と不連続—』（創土社）の普及、販売促進活動に努める。
- ・現時点で未定の事業内容は、随時常任理事会、理事会MLで協議し決定する。

11. 予算案

菅原会計担当理事より2010年度予算案の提案があり、審議の結果総会に提案することとした。

12. 名簿の貸し出し規定

事務局より下記の提案があり、審議の結果総会に提案することとした。

2007年第57回大会（立命館大）時の総会で、人間文化研究機構・「現代中国地域研究の

推進」(いわゆる六拠点) 第一回シンポジウム(2008年2月2日)の要請を受けて一回限りの約束で名簿貸し出しを決定した。その後も同様の要請があるが、そのたびに総会の承認を得るのは困難なので、常任理事会に貸し出し決定権を与えるよう、総会に提案する。ただし、学会の趣旨に合致した内容であること、営利目的でないこと、会員が関与する企画であることを条件とする。

13. 弔意規定案

事務局長より提案があったが、なお審議が必要なため今理事会では決定せず、次期常任理事会までに更に検討することとした。

14. 役員関係

a) 常任理事交替

次の常任理事交替を承認した。

編集委員長：白水紀子(横浜国立大学)→山本真(筑波大学)

西日本部会代表：岩佐昌暲(熊本学園大学)→新谷秀明(西南学院大学)

b) 選挙管理委員候補確認

各地域部会から推薦を求めたところ、関東部会より梁斐会員の推薦があったのみで、他の候補者(関西部会3名、西日本部会1名)については空席とし、次期常任理事会で決定するよう総会に諮ることとした。

15. 総会準備

・三好章理事を総会議長候補とした。

・菅原会計担当理事が校務で総会に出席できないため、瀬戸事務局長が会計報告をおこなうことを確認した。

16. その他

議題の提案はなかった。

二、日本現代中国学会 2009 年度総会議事録

[日時] 2009年10月18日 13:30-14:00

[場所] 神戸大学経済学部 230 教室

* 理事会議事録と内容重複部分は省略。

1. 冒頭に、三好章会員を議長に選出した後、佐々木理事長よりあいさつがあった。

● 報告事項

2. 会務報告(事務局長)

* 時間節約のため、各地域部会報告、専門委員会報告は事務局長会務報告に一本化した。

3. 決算報告(事務局長代理報告)

4. 会計監査報告

山本恒人会計監査より会計は適正に運営されている旨報告があった。関連して、松田康博会計監査より、現中学会の会計年度(10月1日~翌年9月30日)変更を会計作業簡素化のため検討すべきとの発言があった。

審議の結果、各報告は承認された。

●審議事項

5. 2009-2010 事業計画案

瀬戸事務局長より事業報告案の提案があり、審議の結果承認した。

6. 予算案

・瀬戸事務局長より予算案の代理提案があり、審議の結果承認した。なお、予算書などの細部の記述ミスは『現代中国』掲載時には訂正したものを掲載することとした。

・山田敬三顧問より、孫中山記念会より財政援助があったことを会計報告書に記載すべきだとの指摘があり、常任理事会で調査のうえニューズレターなどにその旨を記すこととした。

7. 名簿の貸し出し

理事会提案の通り承認した。

8. 選挙管理委員選出

梁雯（東京大学大学院、関東部会推薦）。他の委員（関西部会 3 名、西日本部会 1 名）は空席とし、次期常任理事会で各地域部会推薦に基づき決定することを承認した。

9. 次期開催校あいさつ

土田哲夫会員（中央大学）より、次期開催校あいさつがあった。

【地域部会活動報告】

●関東部会

関東部会研究会を開催しました。

[日時] 2010 年1月9日（土） 14:00-17:00

[会場] 東京大学駒場キャンパス 18 号館 4 階コラボレーションルーム 1

『新中国の60 年一毛沢東から胡錦濤までの連続と不連続―』（創土社、2009年）合評会
評者：

- ・政治：阿南友亮（成徳大学）
- ・文化：アンニ（晏妮）（一橋大学）
- ・経済：加島潤（東京大学）
- ・法律：梁雯（東京大学・院）

司会：川島真（東京大学）

合評会の内容については、書評として、『現代中国』第 84 号に掲載される予定です。

【2010 年度学会スケジュール（予告）】

●関東部会春季修士論文報告会

5月15日（土）に、東京大学（駒場キャンパス）で開催されます。

●西日本部会 2010 年春季研究集会

5月下旬に開催されます（会場未定）。

●2010 年度関西部会大会

6月5日（土）に、摂南大学（大阪センター）で開催されます。

●2010 年度全国学術大会

10月16日（土）、17日（日）に、中央大学（多摩キャンパス）で開催されます。

報告者の公募など詳細については、随時学会ホームページなどで通知する予定です。

日本現代中国学会事務局

〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22

大学生協学会支援センター内 日本現代中国学会事務局

TEL：03-5307-1175 FAX：03-5307-1196

genchu@univcoop.or.jp

郵便振替：東京 00190-6-155984

広報委員長：加茂具樹（慶應義塾大学） ニュースレター編集：石塚迅（山梨大学）

日本現代中国学会 HP：<http://www.soc.nii.ac.jp/jamcs/index.html>